つどい

第 454 号
2026.8.1

発行・豊中歴史同好会
責任者 小川 滋

風土記は史実を語るのか

―『肥前国風土記』の「石上神之木蓮子玉」伝承を中心に―

皇學館大学特令教授 荊木 美行

前口上

去る令和八年五月九日に、この豊中歴史同好会において「風土記にみる古代人の生活」という題目で講演をいたしました。当日は、たくさんの方々にお越しいただき、ありがとうございました。お礼申し上げます。このときの講演は、おもに『播磨国風土記』のお話が中心でした。予定ではそれと深くかかわる『肥前国風土記』についてもふれるつもりでしたが、時間の都合で割愛せざるをえませんでした。そこで、このたび本会の会報である『つどい』の紙面をお借りし、当日省略したお話を書かせていただくことにいたします。

風土記は、長年私が研究の対象としてきた典籍ですが、これは和銅六年（七一三）に出された政府通達を承けて編纂されたものです。このときの通達は、以下の五項目について、政府が諸国に対し、報告書を提出するよう需めたものです。

①全国の地名に好い字をつけよ、
②郡内の物産のリストを作れ、
③土地の肥沃の状態を調査せよ、
④山川原野の名称の由来を採輯せよ、
⑤古老が代々伝える旧聞異事を集めよ、

これらをまとめて政府に送った報告書が、こんにち謂うところの風土記です。当初は諸国の提出した解（上申文書）でした。「風土記」という名称はあとから生まれたものです。

ここで注目したいのは、④・⑤にみえる地名の由来や古老の語る言い伝えです。風土記は、政府の通達を承けて現地の役人が提出した報告書ですから、地方官人がありもしない話をでっち上げて報告書に記載することはまず考えられません。

むろん、言い伝えが現地で採録されたことと、それが史実をふくんでいることとは、別問題です。しかし、地名の由来や古老相伝の旧聞異事は古くからある言い伝えですから、実際にあった話を踏まえたものもふくまれている可能性があります。長年、風

風土記は史実を語るのか　荊木 美行
―『肥前国風土記』の「石上神之木蓮子玉」伝承を中心に―
「山辺の道の遺跡・古墳めぐり」三回シリーズ
の「内中央ルート」同行記　中村 富美子
第三十八回定期総会報告